

患者ができる社会貢献とは

— 鳴かぬなら鳴かせてみせよう

ホトトギス 松浦静山 —

北村 豊

この外傷が「他人事」とまではクリアーに意識して思ったことはなかったが、11月後半の深夜に妻が「まさか」の橈骨遠位端骨折をしてしまった。

今回、記そうと思うのは、身内の者がその医療者の専門外のワールドの疾患に罹患してしまい、専門科を有

する医療機関“を急患として受診して感じたことについてである。

腕の大きな変形からは、骨折は明瞭であったが、口腔外科指導医でもあり、今までその領域の骨折の施術を多数してきた私には、妻の症例は、開放性骨折でもなく、緊急性は低いとは理解していたものの、COX-2選択的阻害剤を服用させてから隣接する町の県立総合病院をあえて受診することとした。

それは、妻が中学から始めた硬式テニスにおいて3回も全国優勝をしており、これに至るまでには、青春の全てをかけていた！と言っても過言ではない努力を知っていたので、老後は「楽しむテニス」をやってほしく、浮腫性圧迫による神経障害などを懸念したからである。

自己紹介もなく始まった一方向からの単純

X線写真1枚のみをディスプレイに映した説明では、通り一遍に聞こえる説明が一方的にごく短時間行われたが、その後が始まったのは私の娘と医師との会話であった。

娘「レントゲンの写真を撮らせていただいてもいいですか？」
医師「こちらが断る権利はありませんけど、まあいい気はしないですよね。」

娘「すみません：：いい気はしないって事は、SNSとかで拡散されるとお思いなんですか？」

医師「じゃあ何に使われるんですか？」
娘「もちろんSNSに載せるつもりはありませんし、記録として残しておこうと思いついて。断る権利はないってことは：撮ってもいいですか？」
医師「先程申し上げた通り、いい気はしませんし、撮る方なんてい

ないですよ！」
娘「じゃあ、もういいです！」

これを読んで皆様は何を感じられたでしょうか？

医療面接の出発点になる「傾聴」の不足は明白であり、傾聴に必要な非言語的・言語的コミュニケーションスキルを改めてこの病院の医師達に「学習」していただきたい。

地域の人達がこの中核をなす病院に変化してほしいと心より思うなら、戦国武将の信長、秀吉、家康の性格を端的に表したホトトギスの句(松浦静山)のどれを選択するだろうか？

私なら躊躇せずに豊臣秀吉の「鳴かぬなら鳴かせてみせようホトトギス」を選択する。
(上高井郡小布施町 信州口腔外科インプラントセンター所長)